

## 大切なものを見つめて

こんな川柳を目にしました。「疫病を・除く祭りが・除かれて」というもの。思わず苦笑いしてしまいました。元来疫病を除くために行われていたお祭りが、今度はその疫病のために出来なくなつた。祭りはみんなが集まって、絆を深める行事でもあつたはずです。京都の「祇園祭」、青森の「ねぶた祭」、浅草の「三社祭」などは2年連続で中止。あるいは神事のみが行われているなど対応に迫られているようです。その地域で育まれた祭の文化、祭の担い手、伝承する人達は何処へ行ってしまふのでしょうか。夏の風物詩である「花火大会」や「盆踊り」は仏教の精神文化が色濃く関わっています。「花火大会」は元々お盆の精霊送り、送り火の意味合いがあり、「盆踊り」は逝つた人と今ある人、死者と生者との「感応道交(かんのうどうきょう)」仏と人間の気持ち、また教える者と教えられる者の気持ちを通じ合うこと、「の世界で、踊りを演じなければならぬものです。生者が御霊(みたま)を鎮めるための踊りです。

これまた様々な工夫をして稽古を続けているといえます。しかし正式なお点前や習いが滞り、師弟間の心の絆が失われつつある現実もあることは否めません。仏教界を取り巻く環境も、大変厳しい現状にあります。春と秋の「お彼岸」、「お盆施餓鬼(おぼんせがき)」、お会式(えしき)蓮聖人のご命日の法要)などの法要は、形式の変更を余儀なくされ、真成寺でも止む無く「リモート法要」行うこと約5回ありました。ではありますが、リモート画面の向こうでも、正装をされたご親族の皆さまの姿。お仏壇には故人を偲び、気持ちのこもつたお供物やお花が供えられ、ご一緒に読経させて頂きました。

法要後の法話では、涙を流しながら、心からのご供養を行われるその姿に、リモートであろうが、本堂やお仏壇の前であろうが、供養するという気持ちに変わりはない。そしてその気持ちがあれば、それが一番尊いことだし、それこそがまさに「感応道交」した魂の交流会なのだということとを改めて感じました。

### ●【「絆」をシツカリ結んで】

東日本大震災から今年で早十年が経ちました。「絆」という言葉を噛み締めたあの時から、私達は人との「絆」を大切に過ごした十年でもあつたように思います。ただ、その「絆」を結べない状況が、新型コロナウイルス感染症の蔓延に見舞われることで、断絶させられています。三密が叫

ばれるなか、「絆」を深めることが難しくなっています。仏事も大きく変わりました。親戚に会うのは、法事くらの時だと言われていたのが、その法事に集まることすら憚(はばか)れる世情になってしまいました。

かつて当たり前のように行っていた、お通夜、葬儀、四十九日法要、お盆の行事などが、今までのようにはできなくなりました。ましてや、残念ながらコロナ感染症でお亡くなりになると、通夜も葬儀も執り行わず、納骨のみを寺で行うという事もあるようです(ちなみに真成寺は、まだ一度もありません)。

一生懸命家族で看病してきた大切なご家族が、ひとたび入院すると面会も出来ません。そして最後は誰にも会えず、立ち会うことも出来ないのだそうです。いよいよお亡くなりになる頃に、たとえ面会できたとしても、既に意識の無い状態だったりするようです。お身内の方は、お亡くなりになる方と何の触れ合いも、語る事も出来ずに、死を迎えるという、この悲しみは察するに余りありません。

また葬儀は、故人にご縁のあつた多くの方々にお越しいただいて、ご遺族は故人に代わって、これまでのお礼を申し上げる儀式でもありました。そうやって互いに絆を確かめあう大切な時間となつていたはずですが。

仏教では「ご縁」を大切にします。多くの方とのご縁、繋がり合い、関わり合いの中でこそ、人は生きていくこ

とができます。いや、むしろ生きるといふ事は、その繋がり合い、関わり合いそのものであると言つても過言ではありません。色々な事情でやむを得ずに簡略化せざるを得ない場合もあると思いますし、それは致し方ないとしても、なるべくご縁のある方々をお招きする人生の節目となる行事には大きな意味が込められていることを再認識しておきましょう。

どんな形式になろうとも、真心を込めてお見送りすれば、お亡くなりになつた方に「感応道交」通じるものであります。どんな時代の変化にあつても、天の月の如くに変わらぬものは、人のことを心から思う、まごころであり、思いやりにも他なりません。真心や思いやりの気持ちさえ失わなければ、コロナ禍が収まった後にはまた、慶事や弔事といった「絆を紡ぐ」集まりが復活できるだろうと信じています。

自然は、移り変わる、そして人間の社会も移り変わる。全ては移り変わるというのには真理です。そして仏教で最も大切にするのは、人の心です。その心もまた移り変わります。この移り変わりはもつと激しく、仏教では「刹那(せつな)」という1秒間の75分の1という短い時間にも心は生じて滅することを繰り返していると説きます。

「水急にして月を流さず」という言葉の意味するところは、「いかに激流のような中でも、月はそんなことには関係なく、平然とその上に影を落とされていることをいいます。どんな思

いや感情の激流にも動じない「月」というのは、私達の本心・仏心を表しています。私達の毎日の暮らしは、朝から晩まで、あたかも激流のように、あれこれ思い、悩み、考えながら暮らしています。その思いや感情に振り回されているのが実情かもしれません。まずこのことに気が付くことが大切です。時々刻々と湧き起こる喜怒哀楽の情は無くなることはありませんが、その一々の感情に振り回されることなく、主体性を持って過ごすことが何より大切です。嫌なことは避けたいと思うのは人の常ですが、その思いを他人にも広げて、嫌な思いをさせないようにと心掛ければ、「慈悲の心(じひのこころ)」になります。暑い寒いと感じる心があるからこそ、夏は涼しく、冬は暖かくしてあげようという、他人に対する心配りもできます。どんな激流にも流されぬ月のように、どんな自然や社会、人心の変化にあっても変わらぬものは、「仏の心」です。仏心は皆さまの心の中に具わっています。仏心というのは真心であり、思いやりの心です。失うことのない自分の中の「仏心」をしっかりと自覚できれば、どんな激流の中でも主体性を持って受け止めることができるはずですよ。

●【冬至水行祭・ほしまつり】

今年も残すところ、後一月です。かつて疫病や、はやり病が起こった時、人々は神社仏閣に詣でて平癒を願いました。「祇園祭」の由来は、疫病退散を祈って始められた祭事です。日本各地に残る祭りの多くが「病」を起源として興りました。今一度、この祈りの原点を私達は思い出しましょう。コロナ禍にある今だからこそ、私達は祈りがある精神文化を改めて問わなければなりません。十二月十九日(日曜日)【冬至水行祭・ほしまつり】を開催します。疫病退散の祈願が盛り込まれた古来伝統の「ミンギ」を、日蓮宗秘伝の水行によって、祈願を込める祭事です。どうぞ、皆さまの御来寺をお待ち申し上げます。

合掌 副住職 谷川寛敬



第14回 冬至水行祭・ほしまつり

パラダイムシフト <sup>しんが</sup> ~真我にめざめる~

全ての物事は、あなたから始まります。

水行によって「心」を磨き、新たな年を迎える準備をしましょう。

- 日 時
- 場 所
- スケジュール

令和3年12月19日(日)  
真成寺 / 富山県魚津市真成寺町 4-6

早朝の部

5:30 集合・説明会  
6:00 朝勤(本堂)  
6:30 水行開始  
※限定15名。3回以上経験者。

7:20-8:00 於本堂

特別企画講座  
「合同瞑想」

※対象:水行参加者全員(無料)

午前の部

7:00 受付開始  
8:30 説明会  
9:00 水行開始 / 僧侶  
9:20 1組目水行開始  
※全9組。終了予定11:00

11:15 於本堂

冬至祈禱会

※自由参加 / 無料

※特別企画「瞑想」は、水行申込者だけの企画です。水行申込者以外のご参加はご遠慮下さい。

- 会場入場料

終日無料